

原子力行政連絡調整会議専門委員等の意見

平成16年6月16日の福島第二原子力発電所立入調査に同行した福島県原子力行政連絡調整会議専門委員等の学識経験者の意見は以下のとおり。

< 作業の持つ意義を関係者全員で共有を >

操作を単に手順書やマニュアルどおりに行えばいいということではなく、全体プロセスの中でのその作業の役割の理解、さらには不完全な作業をした場合にどうということが起こるのか等のケーススタディ、プロセス個々の作業の持つ意義などを関係者全員で共有するようにしていただきたい。

< 想定外のことが起こった時、迅速に対処できるシステムを >

原子炉格納容器漏えい率検査では、品質保証システムが適切に機能しなかった事例が見られたようだが、想定外のことが起こった時、全体の詳細を把握しているプライオリティがある組織が迅速に対処できるようなシステムを構築していただきたい。

< 事実と判断・解釈の峻別を >

調査説明資料の一部に事実に関する記述なのか、作成者の判断、解釈なのかあいまいなところが見受けられた。トラブルの原因究明等の説明において、事実とそれに対する判断・解釈をはっきり峻別しておかないと、信頼を失うということがあるので、一層努力していただきたい。推定を事実としてしまうような、間違った報告であってはならない。

< 安全には細心の注意を >

他の産業では実害がないなら問題はないとされるかもしれないが、原子力では科学的には問題がない、実害がないようなことでも問題視される。これは、原子力では他の産業に比べて10倍も100倍も高い安全性が求められていることによる。

細心の注意を払って安全は保たれるべきであるが、何かが抜けているとか、不徹底だというようなことでトラブルが発生しては、更に単純なミス、うっかりミスがたまたま重なれば、重大な事故が起こるのではないかと危惧されかねない。

このようなことは幹部の方々は承知されているだろうが、現場の方々にもよく周知していただきたい。

しかしながら若い方が、社会的に意義のある原子力発電に携わっていることに誇りを持って、萎縮せずのびのびと仕事ができる明るい職場であって欲しいと切に願っている。このことがまた安全・安心性を一層深めることにもなる。

< 何が起きるかは分からないという意識を常に持って、対応を >

低炭素ステンレス鋼の応力腐食割れ等、当初解決したと考えていた対策から思いもかけないトラブルが起きたということだと思う。今回補修工法等について新しい技術で対応していこうとする部分は、技術的に立証されているものが使われているとは思いますが、やはりどういことが今後のトラブルにつながるか、そして何が起きるかは分からないという意識を常に持って、対応していただきたい。

< 地域の方々の気持ちに配慮した安全確保への対応 >

ヒューマンエラーをゼロにするのは不可能かも知れないが、出来る限り減らしていくという感覚を常に持つことが、住民の安心につながる。発電所で働いている皆様のご家族などがどういったことで安心するのか、不安に感じるのか、そういった身近な平日頃の生活などから、周辺地域の方々の気持ちに十分配慮した安全確保への対応方法を考えていただきたい。